

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

新羅の骨品と日本のカバネについて

著者	孫 大俊
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	61
ページ	69-79
発行年	2004-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10810

新羅の骨品と日本のカバネについて

孫 大 俊

はじめに

新羅における骨品制については十九世紀の初頭から日本の法制史家によつて「カバネ制」の研究と相まつて関心を集めるようになった。すなわち、骨品制というのは新羅国家の成立過程において現われた歴史的産物であり、日本の氏姓制と同じように古代社会の身分構造と統治機構の解明という立場から研究が進められた。

しかし、骨品の研究はいろいろな困難に直面し、その研究は遅々として進まなかつた。研究を阻んでいる要因として挙げられるのがまず資料の欠乏である。すなわち、骨品制研究の各種資料としては、八世紀以前のものはほとんど全無の状態であり、九世紀の資料としても『三国史記』と

『三国遺事』などの文献がその主なもので、その他の金石文資料としては、聖州寺郎慧和尚白月葆光塔碑（八九〇）と良州深源寺秀澈和尚塔碑（八九三）だけという実情だつたからである。三品彰英が、「骨品制は新羅の王権と社会構造の根本に触れる諸問題を内蔵しており、古代王権国家研究の中心課題である」としながらも、「資料はまことに乏しく……この骨品制の研究に関しては、将来の見通しは必ずしも明るくない」と嘆いたのは故なしとしないところである。

このような実情から骨品制の研究のためには、中国の資料や『日本書紀』などの日本側の資料にまで頼らざるを得なくなる。しかしこの中国及び日本との比較研究に関して、もきわめて悲観的な立場が支配的であつた。「新羅の骨品

制は中国及び日本のそれと基本的構造がちがひ、今日の知見では日本と新羅との社会構成においての直接的な結合は認めることができない」という主張や、新羅の諸制度は日本の氏姓制の成立に何らの影響を及ぼすことはなかった。なぜなら五世紀後半ないし六世紀ごろまでは新羅の氏姓そのものが成立していなかったからだという見解などもその例である。

しかし、日本古代専制国家における身分制度と、特に氏姓制度の解明のためには骨品制の研究が不可欠なものであるとの認識が一般的であり、したがって筆者もそのような立場から上に述べたような諸難点を認めつつも敢えて本稿を草することになった。そこで本稿においては、まず新羅の骨品制と日本のカバネについて概観し、最後に骨品制と日本の氏姓制度との関連について論を進めてみたいと思うのである。

一 新羅の骨品制

1 骨品制の概念

今西龍はそのすぐれた著書の中で、骨品制研究に必要な韓国及び中国の資料二十余を摘出するなど貴重な業績を遺している⁽⁴⁾。これに崔在錫は最近二種類の資料を新たに追加

した。すなわち、『三国史記』卷二十九年表上の「始祖朴赫居世居西干即位元年從此至真德為聖骨」と、同卷三十一年表下の「真德王薨太宗王春秋即位元年從此臣下真骨」というのがそれである⁽⁵⁾。

ともかく、骨品制の資料としてもっともよく知られているのは『三国遺事』王曆に「真德女王已上中古聖骨已中下古真骨」と、『三国史記』卷五真德王八年三月条に、「謂之聖骨自武烈至末王謂之真骨唐令狐澄新羅記曰其国王族謂之第一骨余貴族第二骨」と記録されているものである。これは年代が明らかな資料として評価されているばかりでなく、これらの記事は『史記』と『遺事』の両方に載せられており、これは新羅時代の時代区分のためにも重要なものとされている。

新羅の骨品は一般的に聖骨・真骨の骨制と、六頭品から一頭品まで順次的に身分が下っていく六頭品が結合したものと理解されている。

この骨品制の性格については、いろいろな説がある。たとえば今西龍は、聖骨と真骨は王種であり、これを含めて頭品の六・五・四頭品は貴族であり、三頭品以下は平民百姓の骨品であると見る⁽⁶⁾。武田幸男は、血縁的身分制としての骨品制は王京人に局限して考察すべきでなく、広く地方

人を含む全新羅的規模において評価すべきであるとの前提のもとに、骨は王族の身分であり、そこに属さない王京人は骨から排除されていた。骨制はずっと一階層（真骨相當）に止まったが、頭品制は二、六階層に分化し、時代が下るにつれて細分化される傾向を現わしているという。⁽⁹⁾

一方、李基白は「骨品制は元來聖骨と真骨の二つと、六頭品から一頭品までの八等級に分かれていたのであるが、後に聖骨が消滅し、三頭品から一頭品は平人または百姓などと呼ばれてその細分された意味がなくなった。その結果、真骨・六頭品・五頭品・四頭品・平人（百姓）の五等級に整理されるようになったと主張する。崔在錫は「聖骨と真骨は王族である支配階級、六頭品から四頭品は王族以外の支配階級、三頭品から一頭品までは百姓すなわち被支配階級として呼ぶのがいいであろうとして、やや具体的な見解を披瀝している」⁽¹⁰⁾。

この外にも諸見解があるが、これらの説を総合してみると、概して骨品の身分は①聖骨・真骨の骨と、②六頭品・四頭品、③三頭品・一頭品の三つに分けて考えられるようである。

また、この骨品制が身分制であるのか、あるいは血縁関係であるのかというのも争点の一つである。もともと、骨

品が血縁関係によって規定されていたにしても、骨品制そのものはやはり階級の問題として考えられるべきものであるかもしれない。三品も言っているように、理論的には血縁と階級とは別個の觀念であり、また実際においても混同されてはならないかもしれないが、いくら階級社会であっても血縁それ自体が階級を作り出し得ない。ただ、階級の存在した古代社会にあつては、ときには血縁関係がそれと結びつき、またその存在を支える場合が多かつたことは確かであろう。だから「新羅の場合を一般に照して考えるに、血縁要素が階級形成の中に深く入りこみ、かつそれがある条件付きで世襲的であつたという特色を示しており、この点で骨品はいわゆるカースト（caste）⁽¹¹⁾的性質を多分に持っている」という見方もあり得るのである。

2 骨品制の生成と展開

この骨品制がいつ生成し、かつ制定されたかについては諸説紛々の状態であるが、大体次の二つのブロックに分けて考えることができるようである。すなわち、その中の一つは、聖骨・真骨の時代が頭品の時代より先行するという立場であり、もう一つはこれとは逆に頭品の時代が骨品の時代よりも先立つという立場である。

今西龍は、聖骨・真骨は昔から存在したが、六頭品以下の骨品は中代から存在したといっており、武田幸男は骨品制の母胎は四世紀の奈勿王代（三六五〜四〇二）に構成され、その後、段階的に第二期すなわち六世紀初頭から約三百年間と、最後に九世紀の興徳王代を第三期と見るいわば三段階発展説を主張している⁽¹⁴⁾。

韓国側の学者としては、十代奈解王の即位を前後して漸次形成され始め、十七代奈勿王から十九代訥祗王までの五世紀の初めから中頃に聖骨・真骨が成立し、二十二代智証王の六世紀初頭までには頭品が形成されたと見る見解が一般的である⁽¹⁵⁾。しかし申澄植のように一時代を下げて、骨品が制度として成立したのは新羅の政治制度全般の整備の過程とからみあわせて、王の世襲制が確立した法興王代である六世紀後半と見、頭品制はこれよりも少し遅れて真平王代に成立したと見る立場もある⁽¹⁶⁾。

上のような諸見解は骨品を頭品よりも先行するものと考えている立場であるが、崔在錫は骨制と頭品制の制定時期の差は無視してもよい程度に同時的であるという見解を表わしている。彼によれば骨制が頭品より先に出現したとしても骨制が制度として制定されたのは頭品が制度として制定された時期とほぼ同じであるというのである。その年が

すなわち儒理王九年の十七官等が制定されたときであると⁽¹⁷⁾する。彼は更に敷衍して骨制と頭品が制定されなければ儒理王九年の官等制定や、それから新羅末期までの数多くの特定人に対する官等任命もすることができなかったと主張する。

一方、三品彰英は上の諸学説とは別に頭品の時期を骨制よりも先行させている。彼は「少くとも麻立干時代に金氏の世襲王権が次第に基礎を固め、次の時代すなわち法興王代から金氏王権が拡張して中国風に王を称する中古の時代になる。この王権の拡張と同行して階級制度も次第に整えられたことは推測に難くない」といい、更に「十七等の官等もこの王代にその骨格が整備され……六部の序位の上に王族に系譜するものが優位を占め、王室の官僚群として官位の上では上級の干グループとなり、かつそれが著しく分化した」と当時の情勢を分析し、「こうした情勢下に骨品制も改めて整備され、古く六部に由来するらしい頭品の上に、新しくすなわち王族の系統による聖骨・真骨が架上されたのではなからうか」と言って、その時期を奈勿麻立干の時にたとえているのである⁽¹⁸⁾。

これらの諸学説を総合してみると、大体骨制が頭制より先行しているというけれども、その時代的差はそれほど大

きいものではなく、かえって重視すべきものは骨品制が次に述べるように律令ないし官制ときわめて密接な関連があるということである。

3 骨品制と律令制

『三國史記』には真徳女王二年（六四八）に金春秋が唐の太宗に唐制にならって禮服の制を改めたいと願ひ出ると、唐主は珍貴な衣服を取り出して春秋と従者に与え、詔命をもって彼らに官位を授けた、と記され、そして更に文武王四年（六六四）には婦人の衣服を改革し、それ以後は衣冠が中国と同じになった⁽²⁰⁾という記事がある。これから考えて、この時代に身分を真骨・六頭品・五頭品・四頭品・平民の四段階に分けて、色服・車騎・器用・屋舎などを使い分けたのではないかと思われる。すなわち、この時代は新羅が聯盟国家の段階から中央集権的な貴族国家に轉換されていった時期にあたり、この時に征服ないし併合された各地の大小城邑国家あるいは聯盟国家の支配層を王京に移し、かれらを中央の支配体制の中に編入させたのであるが、この時、これらの勢力の等級と序列を定める目的で制定されたのがすなわち骨品制度であつたと考えることができる。すなわち、中国から律令がもたらされたのは法興王

七年（五二〇）だとされているが、骨品制はこれとは無関係ではなかつたようである。この時、受容された律令について具体的なものは知ることはできないが、だいたい十七等官等、百官の公服、骨品制などに対する規定が含まれていた⁽²¹⁾のであろう。そして上記の金春秋の記事は、新羅の骨品制度をより組織化・体系化する台本として作用したものであろう。

もちろん、その過程においてはいろいろなトラブルもあった。例えば、上大等毗曇の反乱（六四七）などもその一例である。毗曇はいわゆる徹底した男尊女卑の思想家で「姥嬢が閨房から出てきて国家の政事を裁断することの非」を唱えて反乱を起こした。結局失敗に終つた⁽²²⁾が、これが收拾されてから国王直属の執事府が設置されるなど（六五四）律令体制に立脚した改正と整備が断行され、理方府格六〇条を制定するなど、専制国家の構築に拍車をかけた。これらは既存の族制的な体制を完全に清算するには至らなかつたが、このように骨品制度は新羅の国家統合の過程において現われた産物であるといふことができる。

武田幸男も上記『三國史記』第三十三巻の色服条の衣冠制の記事について、この当時の律令はすなわち百官公服と朱紫の秩序に対する規定であり、この衣冠制はほかでもな

い官等制度を表わしたものであつて、その背後には骨品制的な身分制の前提があつたのではないかと指摘している。⁽²³⁾

そして石母田正は日本における位階制はいわゆる朝服制と不可分の関係にあり、これは官等内部の秩序を規定する規範が禮であり、一方、貴賤の身分差を表わす禮の秩序が服色という感性的標識として現われたとして、いずれも色服制の観点から骨品制と氏姓制との関連性を説明している。⁽²⁴⁾ こうしてみると、日本の氏姓制度も古代国家統一の過程における歴史的産物であるという点においては同じ軌道に乗つたものであるということができる。

二 骨品制とカバネ

一般的に「氏姓制」と総括的に呼ばれている日本古代の身分制度は、実は「ウジ」(氏)と「カバネ」(姓)の二つに分けて考えられている。換言すれば、ウジというのは同族関係を表わす指標であり、カバネは身分を表わすものであると言われている。

このウジについて、はやく津田左右吉は「朝廷の官職地位が世襲であり、土地民衆が世襲の領主、すなわち、臣・連・伴造・国造などによつて分布される体制」⁽²⁵⁾であるといひ、直木孝次郎は「ウジは古代の用例から徴して畿内を本

拠として直接朝廷を構成する上級の豪族ないし畿内豪族の組織であり、それ以外の下級の豪族や地方の豪族は原則的にウジの概念の中には入らない」といひ、関晃もウジの中にはいわゆる「公民層」は含まれていないと考え、ウジを畿内貴族に限定する立場をとつてゐる。⁽²⁷⁾

一方、平野邦雄は、「ウジというのは多くの家から構成される同族団体であり、有力家族の長が族長的位置に立つて、その直系・傍系の血縁者及び非血縁者がここに属している。ウジの首長をウジガミというが、ウジガミはそのウジの集団を率いて、ウジを代表して朝政に参与し、その政治的地位に応じてカバネが与えられる。同時に一定の範囲内の血縁者も氏上に準じてカバネを称することができる」と主張している。⁽²⁸⁾

新羅の骨品制と日本のカバネの比較研究は、すでに長い歴史にわたつてゐる。すなわち、谷川清士の『日本書紀通証』に始まり、宮崎道三郎の「姓氏雑考」にいたつて、この点に関する研究は一層深められた。宮崎は「日本古書に骨という字をもつて可婆根(カバネ)ということばに附合させてゐるが、日本の可婆根は韓国古代において氏族の階級を表わすことばとして使われた第一骨・第二骨・真骨・骨品などの骨と同語である」と言つており、また韓国語の

骨自体の意義について「韓国の骨は宗族親族の意を表わすものであり、……したがって日本の可婆根にもまた族の意があるのは当然である」と言っている⁽²⁹⁾。

中田薫は師である宮崎の理論を継承して「可婆根ということばが韓国語の骨の直訳であるのと同じように、可婆根の制度それ自体もまた韓国から流入したものである」と言っている。中田はまたその時期について「カバネの呼称がある程度整頓されたのは日韓の交通が頻繁になった応神・仁徳以後であろう」と敷衍している⁽³⁰⁾。

ともかく大陸の骨品制は単純な制度としての輸入に止まらず、このカバネの社会的・イデオロギー的なものは古く蒙古族あるいはアルタイ語族の「骨」ということばの父系氏族または種族を意味するところに始まると言われている⁽³¹⁾。すなわち、日本語のウジというのは蒙古語の「*uji*」やトルコ語の「*uqu*」、または韓国語の「*u* (族)」と対応することばで宗族または男子を意味し、このように古代日本の国家体制の基礎を表わす部分にはアルタイ系または韓国語系に類似点を持つものが多いのである⁽³²⁾。

これは更に『倭人伝』などに表われている一字一音の人名や官吏の名前である「ヒコ・トモ・ヒナモリ・ナカトミ」などにもすでに現われており、音韻の対応および文法

的単位や造語法など多くの共通点があつて、このような言語構造はすでに弥生時代である紀元前後の時代から影響を受けているという⁽³³⁾。

ともかくこのカバネというのは豪族の身分を表すものと考えられている称号であり、前にも簡単に言及したように「公(君)・臣・連・直・造・首」などと表記されているものであるが、そのルーツは上述したように相当古くまで遡ることができる。しかし、その具体的展開の時期に関する見解にいたっては大きく二つに分かれる。その一つは、

『記紀』に従つてカバネは五世紀以後に成立したものであり、朝廷が氏の政治関係の表現として賦与したものであり、朝廷が氏の政治関係の表現として賦与したものと考える立場でいわば通説である。その二つは、金石文などに見られる費直・岐弥などのカバネが『記紀』に見えるカバネと違つて粗雑であるとの理由から『記紀』のカバネはいわゆる天武史局による定姓に過ぎないものであり、大化時代にはカバネの制度を認めることができないとするものである。特に後者を主張する立場は『記紀』に直とみえてくるカバネを金石文では費直と記録し、『書紀』が臣のカバネを持つていると記録している穂積押山を百濟本紀では「意斯移麻岐弥」と記録して、まるでキミのカバネを持つてい

るようにみせかけている。このように『記紀』のカバネとそのほかの史料のカバネがお互いに異なるのは『記紀』の記述に編者の手が増えられているからであり、したがって『記紀』によってカバネの成立時期を考えることはできない^②というのである。

三 骨品制と氏姓制

日本のカバネと新羅の骨品制の間には内容にもそして時期にも差があることは否めない。その中でもっとも大きい差異点は、日本においては「部制」と「族制」が完全に融合してしまっているのに対して、新羅の場合はいわゆる「六部の制」と「骨品制」が深い関連性を持つていながらも、一応明確に区分されているという事実である。

そればかりでなく、より根本的な問題点は骨品制が新羅社会の基調をなすものでありながらも、軍備・官職・官位そのほかの諸制度が比較的に新羅社会の特色をよく表わしているのに対し、この骨品制が制度としてきわめて貧弱であるということである。また新羅の場合は国王も聖骨・真骨の身分を持っているのに反して、日本においては天皇はカバネを有しないという点、前者は骨品と官等との関係において身分ごとに官等昇進の上限がきびしく規制されてい

るのに対して、後者はこの点において融通性があり、また骨品制はその社会的基盤として王都の部族組織をもっているが、後者の場合はその点が明らかでないなどの点である。また新羅の骨品制はその表記法においても、中国や日本の場合とちがって骨品名が人名記載の不可欠の要素ではなく、その点からも性格の差異点が指摘されている。

新羅の骨品制と日本の氏姓制との関連性について李基東は、大化前代のカバネ制が皇親制樹立のための天武朝の政治的氏族対策の産物であって、八色姓が制定されるまでは無秩序で非体系性を帯びており、したがって八色姓の制定という国家的定姓作業の結果、カバネの尊卑が明確な形の身分秩序として完成したという北村^③などの見解を踏まえて、「骨品制をカバネ制と比べる場合、大化前代の氏姓制度とは差異は多いが、天武朝の八色姓とは類似点が多い」と指摘している。すなわち、骨品制度の基礎が氏族であったのに対して大化前代の氏姓制度は擬制氏族すなわち政治的従属関係を軸として成立した政治的同族集団であり、また骨品制度がそれ自体世襲的な職業の分化に基づかずに編成されたのに対し、氏姓制度はこの世襲的な職業制をその基礎に置いたとし、したがって八色姓の制定にいたって氏姓制度が一つの政治的・社会的体制としての転換を見せる

ものであり、骨品制とより近接した関係を見ることができるといのである。³⁶⁾

確かに、骨品制と氏姓制の間には種々の違いがあり、その関連性を否定的に見る主張にもそれなりに根拠がある。それにも拘わらず、この両者には少なからぬ類似点があるのもまた確かである。

むすび

古代中国においては「姓」と「氏」が別にあつて、「姓」は主に血縁的氏族を表わし、「氏」は領土的氏族制を表わしていたという。換言すれば、血縁関係を表わす「姓」は特権的身分を表わしていたのである。³⁷⁾このような面においては日本古代のカバネと相通じるものがある。

古代の三国においても、みな「姓」を称するのは特定の支配層に限定されており、このような面において「姓」は身分を表わすのに重要な要素であつた。新羅における姓の嚆矢は『北斉書』巻七の河清四年（五六五）の「新羅国王の金真興を以て使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王となす」であると言われている。³⁸⁾これは新羅において姓が一部特権層のものであり、その時期から「金」という王姓以外の姓が

見えてくる。

もちろん『史記・遺事』には諸姓が早くから見えている。六部の賜姓（李・崔・孫・鄭・裴・薛）に始まり、その外にも随所に諸姓が見える。しかし、これらは後代に系譜に従つて遡及して記述したものであり、やはり確実なものとは真興王冊封記事とするのが正しいようである。その後『史記・遺事』には伝説時代を除くと七世紀以後に諸姓が見られ、それらは『日本書紀』などにも多く登載されるようになる。

また日本のカバネはウジに比べれば二次的な属性に過ぎないといわれるが、「姓」の文字はよく「ウジ・カバネ」の両方の意味に使われるほど、この両者は不可分の関係にある。そして、この「姓」も朝廷から賦与されるものであり、「氏」の国家政治上における地位を表し、「氏」の内部においては家格の上下を表すものでもあつた。

そして、日本の氏姓制度は身分において、皇室を中心とする上級身分階層と、中級ないし下級身分階層に分けることなど、新羅の骨品制との類似点も多いということが出来る。そして、これが時代的に韓日間の交渉が頻繁であつた六世紀から七世紀にかけて制度化されていったものであろう。そして七世紀の後半に至つての「八色の姓」を経て、

律令制下における「身分制度」として再編されていたものと考えられる。

註

- (1) 三品彰英「骨品制社會」〔古代史講座〕(七)、二〇九頁 参照)
- (2) 井上秀雄「新羅の骨品制度」〔歴史學研究〕三〇四号、四二―五一頁参照)
- (3) 平野邦雄「大化前代社會組織の研究」四〇二頁参照。
- (4) 今西龍「新羅骨品考」〔新羅史研究〕一九三―一九六頁 参照)
- (5) 崔在錫「韓國古代社會史研究」一志社、四二三頁
- (6) 一然「三國遺事」(金思燁譯、六興出版) 四五頁
- (7) 金富軾「三國史記」(上) (金思燁譯、六興出版) 一二二頁
- (8) 今西龍「新羅骨品考」〔新羅史研究〕二〇二頁以下 参照)
- (9) 武田幸男「新羅骨品制の再検討」〔東洋文化研究所紀要〕(六七)、一二二頁以下 参照)
- (10) 李基白「新羅社會經濟史研究」一潮閣、三四頁
- (11) 崔在錫「前掲書」四〇〇頁以下 参照。
- (12) 三品彰英「前掲論文」一九二―一九三頁 参照。
- (13) 今西龍「前掲論文」一九三―二〇四頁 参照。
- (14) 武田幸男「前掲論文」一九九―二一二頁 参照。
- (15) 崔在錫「前掲書」四〇八頁以下 参照。
- (16) 中澄植「新羅史」梨花女大出版局、一六一頁 参照。
- (17) 崔在錫「前掲書」四〇六頁 参照。
- (18) 三品彰英「前掲論文」二〇五頁
- (19) 金富軾「三國史記」(上)、一二二頁
- (20) 金富軾「三國史記」(上)、一二二頁
- (21) 李基白「韓國史新論」一潮閣、五八頁
- (22) 金富軾「三國史記」(上)、一二〇頁
- (23) 武田幸男「新羅法興王代の律令と衣冠制」〔古代の朝鮮と日本〕所収八五―九三頁。
- (24) 石母田正「古代官僚制」〔古代國家論〕所収、八―九頁 参照)
- (25) 津田左右吉「日本上代史の研究」九〇頁 参照。
- (26) 直木孝次郎「日本古代の氏」〔古代史講座〕(六)、二七四―二七五頁
- (27) 関晃「日本古代身分階級」〔古代史講座〕(七)、二三〇―二三五頁
- (28) 平野邦雄「前掲書」二三 参照。
- (29) 宮崎道三郎「姓氏雜考」〔法學協會雜誌〕二三―二、二三―三所収)
- (30) 中田薫「日本法制史論集」一〇二七頁 参照。
- (31) 前川明久「日本古代氏族制の形成過程」〔歴史學研究〕二九八号、二 参照)

- (32) 江上波夫『騎馬民族國家』（中公新書）二二二～二二三頁参照。
- (33) 大野晉『日本語の世界』八九～一一〇頁参照。
- (34) 武光誠「姓の成立と庚午年籍」（井上光貞『古代史論叢』（上）、五四四頁
- (35) 北村文治「カバネの思想と姓の制度」（坂本太郎記念『続日本古代史論集』（上）、三七二頁以下参照）
- (36) 李基東「新羅の骨品制と日本の氏姓制」（『歴史学報』九四、九五合本、一四九～一五七頁
- (37) 尾形勇「中国の姓氏」（『日本古代史講座』一〇、一八頁）
- (38) 拙稿「古代三国の姓氏について」（『法政考古学』第二九集、三三〇頁参照）